

*Henrici de Gandavo Opera Omnia,*  
 Ancient and Mediaeval Philosophy Series 2,  
 De Wulf-Mansion Centre, Catholic University of Louvain,  
 Leuven, Belgium, 1979-1994.

Henry of Ghent,  
*Quodlibetal Questions on Free Will,*  
 Translated from the Latin with Introduction and  
 Notes by Roland J. Teske, S. J.  
 Mediaeval Philosophical Texts in Translation, No. 32.  
 Milwaukee: Marquette University Press, 1993. xii+109 pp.

加藤雅人

比較的最近 (1970 年代) まで、ガンのヘンリクス (1240?-1293) の著作は、16 世紀の古い版でしか読むことはできなかった (*Quodlibeta*. 2 vols. Paris, 1518, rpt. Leuven, 1961. *Summa quaestionum ordinariorum*. 2 vols. Paris, 1520, rpt. St. Bonaventure, N. Y., 1953.). だが、ベルギーのカトリック・ルーバン大学より 1979 年以来刊行中の『ガンのヘンリクス全集』(標記・前者)によって、今や状況は劇的に変化した。この新しい批判的校訂版『全集』を用いて、ヘンリクスの『任意討論集』を欧米の現代語にはじめて翻訳 (抄訳) したのが標記・後者である。以下の論述は、まず、『全集』の成立事情と編集の基本方針について、つぎに、『任意討論集』の内容と翻訳について、最後に評者のコメントについての順に進められる。

ヘンリクスの著作の新しい版を編集し発刊しようとする動きは、既に 19 世紀末からあった。1885 年、エーレはヘンリクスの著作の新版の刊行を予告した (Franz Ehrle, "Beiträge zu den Biographien berühmter Scholastiker: Heinrich von Gent," *Archiv für Literatur- und Kirchen Geschichte des Mittelalters* I, 1885, pp. 365-401 & 507-8). しかし、約 10 年後の 1894 年、ド・ウルフはその計画がまだ開始されていないことを嘆いた (Maurice De Wulf, *Etudes sur Henri de Gand,*

Louvain-Paris, 1894, p. 20). その後その計画はルーバン大学の哲学高等研究所 (Institute Supérieur de Philosophie) に引き継がれ、1901年、ド・ウルフは *Les Philosophes Belges* という新シリーズの第一作のなかで、ヘンリクスの著作の編集作業の開始を予告した (Maurice De Wulf, *Le Traité 'De Unitate Formae' de Gilles de Lessines. Text inédit et Étude*, *Les Philosophes Belges I*, Louvain, 1901, p. iv). しかし、この約束もなかなか実行に移されず、1960年の第一回国際中世哲学会において、ヘンリクスの著作の批判的校訂版を待望する声が挙がった (Gérard Verbeke, "Les éditions critique de textes médiévaux", *L'homme et son destin d'après les penseurs du moyen âge*, Actes de premier Congrès international de philosophie médiévale, Louvain-Paris, 1960, p. 781).

こうした経緯のなか、ついに1978年、ルーバン大学出版局は De Wulf-Mansion センターの Ancient and Mediaeval Philosophy の新シリーズとして『ガンのヘンリクス全集』の出版を決定し、翌79年より刊行を開始した。同センターは内外の7名の研究者からなるガンのヘンリクス委員会を組織し (R. Macken, Catholic University of Louvain; H. A. G. Braakhuis, Catholic University of Nijmegen; J. V. Brown, University of Windsor, Ontario; J. Decorte, Catholic University of Louvain; L. Hödl, University of Bochum; R. Wielockx, Catholic University of Louvain; G. A. Wilson, Xavier University, New Orleans, Louisiana), マッケンを委員長とするその委員会が編集の責任を負うことになった (R. Macken, "Der Aufbau eines wissenschaftlichen Unternehmens: die 'Opera Omnia' des Heinrich von Gent", *Franziskanische Studien* 65, 1983, p. 82-96). 予定されている全46巻のうち、現在までの既刊 (印刷中を含めて) は15巻である。

1968年以来、マッケンはヨーロッパの国々をまわって236の写本を収集し、それらをマイクロフィルムに収めた。『全集』第I巻・第II巻には、それらの目録と綿密な解説が書かれている。第V巻～第XX巻には『任意討論集』(全15巻)が収められる予定である。マッケンは、集めた写本のなかからヘンリクス自身が校正 (修正) した本原稿 (original) を PARIS, *Bibl. Nat.*, lat. 15350 と確定した。そして、PELPLIN, *Biblioteka Seminarium Duchonego*, 33(46) から、そのモデルとなったある写本の存在を想定し、この写本が大学模範写本 (1) (university exemplar) のモデルであったと推論した。さらに、BOLOGNA, *Bibl. Universitaria*, lat. 2236

と VALENCIA, *Cat.* 46 から、別の大学模範写本(2)の存在を想定し、この大学模範写本(2)の写しの一つが、これまで一般に入手可能であった唯一の版である 1518 年のパリ版の直接のモデルであったとマッケンは推論した。以上から、彼は『任意討論集』の写本の伝達経路を次のように推測した。本原稿→ある写本→大学模範写本(1)→大学模範写本(2)→多くの写し→そのうちの一つ→1518 年のパリ版。マッケンがこのように、PARIS, *Bibl. Nat.*, lat. 15350 を本原稿とし、そこからパリ版までの経路を追跡したことは、『全集』の他の巻の編集作業の基本方針となる大きな発見であった。

今回抄訳された『任意討論集』は、ヘンリクスがパリ大学教授を務めた 1276~1291/2 年の間に毎年行なった任意討論の記録である。訳者の Roland J. Teske は、人間の自由意志を扱った 5 つの問題 (第 I 巻 14 問・15 問, 第 IX 巻 5 問・6 問, 第 XIV 巻 5 問) を英訳した。まず、ヘンリクスの前期著作である第 I 巻 (1276 年) では、意志と知性の先・後関係について扱われる。14 問では意志のほうが知性より高い能力であることが論じられ、15 問では知性認識が意志の働きに先立つことが論じられる。つぎに、1277 年の異端宣告を経て構成された後期著作である第 IX 巻 (1286 年) では、意志と知性との厳密な関係について扱われる。5 問では、意志は意志自身を動かすことが論じられ (これはアリストテレスの命題「動くものはみな他者によって動かされる」に対立する)、6 問では、命令は意志の働きであって知性の働きではないことが論じられる。最後に、第 XIV 巻 5 問 (1290/1 年) では、意志の自由とは「衝動やその他いかなるものの干渉にもよらず、内発的原理それ自体によって、自らの善を獲得するための働きを遂行することができる状態」であると規定され、知性にもある程度の自由は認められるが、意志のほうが知性よりも自由の度合いが大きいと結論される。

訳者 R. J. Teske の解説によれば、意志と知性のどちらの能力が上かという問題は、それ自体としてはどちらでもよい問題に見えるが、実は、知性の役割に重点を置く側の人々と意志の役割に重点を置く人々とを分ける目印となる重要な問題である。前者のいわゆる「主知主義」の側にはトマス・アクィナスはじめ多くのアリストテレス主義者がおり、後者のいわゆる「主意主義」の側には「ネオ・アウグスティヌス派」の人々がいる。ネオ・アウグスティヌス派には、アクィナス以前のドミニコ会士、フランシスコ会士、そして在俗の教師のほとんどが属する。主知主義者のなかには、

人間的自由を明らかに脅かすような教えを説く人もいる。これまでヘンリクスはドゥ  
ンス・スコトゥスの先駆者とみなされ、極端な主意主義者のレッテルを貼られてきた。  
しかし、本訳書を通じて、ヘンリクス自身の説が正当に再評価されるならば、そのよ  
うな極端な解釈が誤りであると気付かれるであろう。しかし、1277年の異端宣告に  
おいて、行き過ぎたアリストテレス主義として断罪された、219の命題を作成した委  
員の一人であり、またネオ・アウグスティヌス派の一員であったヘンリクスは、人間  
的自由を害なうような見解には反対する立場をとった。したがって、意志を受動的能  
力とみなし、天体によってであれ知性の対象によってであれ、意志が他の何かによっ  
て現実化される必要があるなどと考えることは、ヘンリクスの立場ではなかった。

最後に、今回抄訳されたテキストに関して、評者が気づいた点に触れておきたい。  
まず、第IX巻5問の pp. 33-49における動物の運動についての詳細な説明は、アリ  
ストテレスの『動物運動論』の複数の部分の要約となっており、偶然にも、ここにヘ  
ンリクスがアリストテレスやアヴェロエスから、予想外にかなりの影響を受けていた  
ことが示されている。また、第XIV巻5問の翻訳時点では『全集』版テキストが間  
に合わなかったので、訳者自身が古いパリ版の欠字を補って推測した部分がある。  
そのため、テキストの読みにおいて、J. V. Brown 編集の『全集』版テキストと若  
干の相違があるのは残念である。まず、p. 77, n. 11で訳者は *communis* の前の  
*minus* を削除して読んでいるが、実際のテキストには *minus* がある。さらに、p.  
78, n. 13 と n. 19 の *Commentator* は、実際には Averroes ではなく、Michael  
of Ephesus (*Aristotelis Moraliū ad Nicomachū Decimū*, X, c. 7, ed.  
Merchen, pp. 417-18) である。また、p. 85, n. 50の参照箇所は、*In Phys. VIII  
Comm.*, comm. 4 (ed. lutina, IV, f. 380B) である。ところで、今回抄訳された第  
I巻14問・15問は、この英訳とほぼ同時期に和訳も出版されている(ガンのヘンリ  
クス「任意討論集」八木雄二・矢玉俊彦訳、『中世思想原典集成13 盛期スコラ哲学』、  
平凡社、1993)。これらの翻訳によって、これまでほとんどヴェールに包まれ、間接  
的にしか知られていなかったヘンリクスの思想が、直接人々の目に触れますます解明  
されていくことを期待したい。